

# ミストラルと鷗外

—「蛙」をめぐる—

畠 中 敏 郎

## 1

鷗外森林太郎のなした翻訳の中に、戦後の岩波新修「鷗外全集」（以下「全集」という）では翻訳篇第16巻に収録の、わずか5頁余の「蛙」というのがある。すでに量において取るに足らないものである上に、これまでのこの文人に関するおびただしい評論註釈の中で、内容にまで立ちいって問題とせられたことの極めて少い作<sup>1)</sup>であって、「全集」総計53巻の中でも甚だつましい存在といわねばならない。しかし、第1には今まで知られている限り明治大正時代においてのほとんど唯一つのプロヴァンス文学（フランス地方文学）作品のまとまった翻訳（鷗外の後輩であり友であった上田敏が「海潮音」に入れたオーバネルの詩3篇は、やはりプロヴァンスの作品であるが、これは原詩それぞれの極めてわずかの断片に過ぎない）として、第2には鷗外訳としてひろくフランス文芸全体の晩年の代表として、第3に鷗外がその翻訳乃至文芸生活に自ら終止符を打った寓意的な作物という意味で、看過することの出来ないものだと考えられる。

## 2

「蛙」の原作者はフランス人フレデリク・ミストラル Frédéric Mistral であり、プロヴァンス語即ち南仏地方語の原題を「ナルブーノの蛙」La Granouio de Narbouno という。鷗外訳でも、最初これが雑誌「我等」に掲載せられたときは、原題のフランス語訳と同じ「ナルボンヌの蛙」であったが、後に改題

せられて単に「蛙」となり、これを収録した単行本自体も、巻頭のこの篇の名を取って「蛙」と題せられた。

ミストラルは西暦1830年9月、南仏の古名プロヴァンスといわれる地方の村マヤーヌに生まれ、1914年3月に逝去した。プロヴァンス地方語を復活洗練し、これによって郷土文芸を再興し、ひいては南仏の郷土主義復興を行うことを、生涯の目標として着々とそれを達成した。他の6人の最初の同志とともに作ったフェリブリーゼ社はこの目的を遂行するためのもので、彼はその頭領となった。長篇叙事詩「ミレイオ」で全フランスに認められた後、「カレンダウ」「ローヌの歌」「黄金の島々」「ネルト」「オリーブ摘み」など一連の作物を出し、その一方今に比肩するものがないプロヴァンス語フランス語対訳辞典「フェリブリーゼ宝典」を編著刊行した。フェリブリーゼ社の機関誌「プロヴァンス年鑑」は1855年の創刊以来今日まで年1回の発行を続けている。1904年、フランス人として2人目のノーベル文芸賞を受け、その賞金を投じて郷土博物館をアルルに創設し、一方全フランスの各地方郷土主義者に精神的な地方復興を呼びかけた。また同じラテン民族のよしみからイタリアやカタルーニャ（イスパニア東部）の同志と文化的結束を堅めた。晩年はプロヴァンス最大の名士としてフランス内外の敬慕を集め、ドイツ人からは「プロヴァンスのゲーテ」と呼ばれ（こうした名称の好悪は別として）、南仏の神格的人物と仰がれながら、敬虔なカトリクらしい質朴簡素な生活を全うしたのである。

そのミストラルが自らの前半生の伝記として1906年パリのプロン・ヌーリ社から出版したのが「私の身の上。思い出と物語」Moun Espelido. Memòri e raconte で、プロヴァンス語版、自訳の仏語版、さらに後にこの2つを併収した版の3種類が存する。問題の「ナルブーノの蛙」（仏語版「ナルボーヌの蛙」La Grenouille de Narbonne）は元来雑誌「プロヴァンス年鑑」Armana prouvençauの1890年の号に掲載せられ、後に他の4つのいずれも曾て「年鑑」に出た短篇とともに、この自伝の第13章にやはり「プロヴァンス年鑑」の題で挿入せられたもの。今日の八折型プロヴァンス語版で正味6頁余、4節に分れ

る。以下の梗概中の個有名詞で、表のがプロヴァンス語、括弧内のがフランス語式の言方である。後の必要のため煩を承知で併記する。

(1)暑い6月の昼、指物職人ピニュレー Pignoulet(ピニョレー Pignolet) がグラソ Grasso (グラス Grasse) へ帰る。職人組合員で、彼等の習慣通り見学と修業とのためにフランスめぐりをしたのだ。腕と見聞とに自信満々、愛するミウン Mioun (ミオン Mion) と結婚しようと心楽しい。

(2)帰宅して父ピニョウ Pignòu (ピニョール Pignol) や母マルガリード Margarido (マルグリート Marguerite) に迎えられ、見聞を語る。(3)機嫌のよかった父は、ピニュレーがナルブーノで、サン・パウ Sant-Pau (サン・ポール Saint-Paul) 教会の聖水盤の底に彫った蛙に気づかなかったのを怒り、「あれを見ないでは何にもならぬ。明日は引返して見てこい」と命ずる。(4)息子は、またの長旅に疲れはててナルブーノへ着き、水盤をのぞく。赤い縞のある蛙は、生きもののように金の目を光らせ、ピニュレーをからかう如くだ。「お前のためにまた200里を歩かせられた返報に、グラソのピニュレーを忘れないようにしてやる」と、金槌とのみとを取出し、一打に蛙の1つの肢を飛ばす。そのとき水は血に染んだように赤くなり、以後水盤の中はうす赤いという。

### 3

この小篇を訳した鷗外の「ナルボンヌの蛙」は、雑誌「我等」の第7号(大正3年7月1日)の181頁から186頁に載った。この誌は10号をもって廃刊となるが、月刊、編輯兼発行人万造寺齊、発行所同人宅、癸売岩波書店であった。さらに大正8年5月13日玄文社発行の三田文選別冊「蛙」の中に、各国の小説、詩、戯曲の作者12、篇16の鷗外翻訳の巻頭に、書名と同じ「蛙」と改題、収録せられた。

原作では4節に分れていることを前述したが、和訳では何等の分目も設けない。人名地名などの読方はすべてフランス語に従い、地名については、エクス

をエエス、アルルをアアル、モンペリエをモン・ペルリエエというように誤読したりまたは今日と表記の異なるものもある。Narbonne はナルボンヌとしてあるが、これは Jeanne をジャンヌという場合などと同じく、明治以来の慣例ともいえる書方で、ナルボヌ、ナルポーヌ、ナルボンヌのいずれにしてもどれが最も正しいとも間違いとも申せないことは、「ギョオテとはおれのことかとゲーテいい」と一般である。「我等」所載のものと単行本「蛙」とでは、題名の違いのほか若干言葉の使い方や文字の表現の差があるが、ここに挙げるほどのこともない。また、「全集」中の篇「蛙」は雑誌の「ナルボンヌの蛙」でなく単行本「蛙」に依ったものと考えられることは、上に申した題名や文辞の違いがすべて後者の通りになっていることで推量し得る。さらに単行本「蛙」と「全集」との間にもいくらかの差異が見受けられるし、このことは第2次大戦前的一种ならざる旧「鷗外全集」と戦後の新版「全集」との間にも指摘出来る。要するに、「我等」「蛙」「全集」の3種を通じて、内容には特筆すべき大きな差は認められない。

#### 4

ミストラル原作は鷗外によってどの程度忠実に翻訳せられたか。この2つの間の大きな違いを概括するとつぎの三点となる。

- イ 邦訳では全体に原作を縮めてあること。
- ロ 同じく人物の名や記述内容に、違い、出入り、入れかわりのあること。
- ハ 特に物語の結末に大きな差異のあること。

縮約は原作の(1)の部分、特にその前半で著しい。というのはこの部分は、ピニユレーが旅をして来たその詳しい経路や彼の服装持物などを刻明に述べた個所であり、これは外国の一般読者にはさして興味のないものであるからとも一応は考えられよう。

(1)の後半では、原作乃至仏訳において、「嬉しいな、楽しいな、お父さんとお母さん」とに挨拶して、グラースのうまい水をかめから飲んで、フランスめぐり

の話をして、それから、ミウンのみずみずしい頬に接吻して、それから聖マгдаラ（の MARIA）の祝日が来たら二人が結婚して、それからは家を離れないのだからな」とあるピニユレーの独りごとが、邦訳になると、「久しぶりでお父つさんやおつ母さんに逢つて、冷たい井戸の水を飲んで、旅の話をして、血色の好い、そしてひやりとするやうなロゼットの頬つべたにキスをして遣るのだ」となる。ここでの大きな違いは、接吻する女の名がミウン（仏ミオン）からロゼットと変り、かつ結婚して家を離れまいという件が全く省かれてしまっていることである。このことについてはさらに後に触れることとする。

原作の(2)の部分に対しては目立った省略や改変は存しない。

(3)で、自らも職人として昔同じ旅をした父に語る遍歴譚で、父子の問答にやはり随所の縮約が行われ、2人の言葉が原作と逆になっている個所さえ珍しくない。ここに出す鷗外訳は、この節の始めから3分の1ほどの所からである。息子の詞から始まる。

「それからアアルへ往つて議事堂を見ました。」

「あれは立派な物だ。己はアアルからサンジルへ往つて螺旋梯を見たつけ。それからモン・ペルリエエへ往くと、人が名高い貝を見せてくれたつけ。」

「ええ。モン・ペルリエエの喇叭と云ふのでせう。」

「さうだ。あそこから己はナルボンヌへ往つたのだ。」

「わたしもナルボンヌへ往きました。あそこではサン・ポオルの寺の板張を見ました。」

「その外、何を見た。」

「その外には何もありません。」

最初の「それからアアルへ往つて……」は、原作ではそのつぎに父子のやりとりがあって、父が市役所（議事堂はその中にあるのだが議事堂そのものではない）の丸屋根を賞める。つぎの「あれは立派な物だ」はその讃辞を簡約したのであるが、サン・ジルへ行って螺旋梯を見たという言葉は原作では息子のもの

である。ミストラルでは、そのつぎにこの息子の言を受けて父が、その螺旋梯の細工を称え、昔の職人にも良いのがいた、という。モンペリエへ行くと名高い貝が見られたというのは、これに続く息子の言となり、従って「モン・ペルリエエの喇叭云云」はそれを受ける父の詞である。「ナルボンヌへ往つたのだ」は原作ではまず子のいうことで、父は「その話を待つていたのだ」と答える段取となる。子が、「どうしてです。ナルボンヌでは三人の乳母と、大司教館と、それからサン・ポール教会の板羽目とを見ました」というのに対して、邦訳にある「その外、何を見た」になるのである。

さて、(4)の結末の部分を見よう。主人公が聖水盤に彫りつけられた蛙に対するところである。まず鷗外訳を挙げる。

ピニヨレエは葎の中から鉄槌を取り出した。そして力任せに、続け打に蛙を打つた。

伝説によれば、此時水盤の水が忽然鮮血の如く赤く染まつたと云ふことである。

ナルボンヌの市が名物を一つ無くしたのはかうしたわけである。

ところが原作と仏訳とでは、

Em' aco lou fenat, vès, de soun paquetoun tiro sa masso e soun escaupre, e pan ! d'un cop à la Granouio éu fai sauta 'no cambo. Subran l'aigo-signado, coume tencho desang, dison que venguè roujo; e dóu benechié la conco es rouginouso desempieï.

Et voilà le sacrispant qui, de son baluchon, tire son maillet, son ciseau, et pan ! d'un coup, à la grenouille il fait sauter une patte. On dit que l'eau bénite, comme teinte de sang, devint rouge soudain, et la vasque du bénitier, depuis lors, est restée rougeâtre.

すなわち、「金槌とのみとを取出して、ぽんと一打で蛙の一つの肢を飛ばし

てしまった。(以下は邦訳と変りがないので中略)それ以来、聖水盤の中はうす赤い」というのであって、鷗外訳に見るように金槌で乱打したのでも、蛙の全身が潰れるか飛んでしまったのでもなく、また「ナルボヌの市が名物を一つ無く」するに至ったわけでもない。これは原作と邦訳との最も大きな相違点である。

## 5

さきに述べた原作の二つの版、即ちミストラル「自伝」中の「ナルボヌの蛙」と、そのもととなった雑誌「プロヴァンス年鑑」中の同名の物語との間にはどんな違いがあるだろうか。因みにこの「年鑑」は全くプロヴァンス語だけで書かれている。挙げるに足らぬ小さい差異は別として、問題点は2つある。第1は、さきに引用したナルボヌの名物の件で、「3人の乳母と大司教館と」と自伝にあるのに、雑誌ではこの「3人の乳母」が省かれていることである。この3人の乳母とは、かのサン・マール Cinq-Mars が処刑せられた場所である16世紀の建物の外側に彫られた柱頭像で、その形から想像してかく名づけられたもの。ミストラルは雑誌に「蛙」を掲載した後に、自ら気がついたか他からの註文を入れたかで、「自伝」においてこの名所のことを補足したものであろう。第2は、蛙自身の件である。「自伝」の方では、これもさきに引用したように、「金槌とのみとを取出して、ぼんと一打で蛙の1つの肢を飛ばす」のに対して、雑誌では、…e pan! d'un cop de masso éu fai sauta la granouio (ぼんと一打で蛙を飛ばす) となり、そのあと少し飛んで、「それ以来、聖水盤の中はうす赤い」で終る「自伝」の文は、雑誌では全く様子を変えて、E la granouio de Narbouno, es d'aquéu biais que periguè (ナルブーノの蛙が失せた次第はこのようである) と結んである。詳説を省くが、問題の蛙はこの教会にまつわる伝説に基いて彫られたもので、現在でも会堂の1つの柱にとりつけた聖水盤の底に残っており、右の前肢はたしかに切れてはいるものの、肢先まで完全な姿をとどめている。盤の中はいかにも筋が入ったように

うす赤い（昭和36年9月現地所見）。ともかく、ミストラルは最初蛙の最後を派手に扱ったが、後に「自伝」へその篇を収めたとき、これも自他いずれかの見聞によって修正して、伝説の蛙の現状と一致させたのであろう。

## 6

ミストラル作品のドイツ訳のうちこの「自伝」のそれは、E.V. Kraatz がものした *Erinnerungen und Erzählungen*, 1908 と August Bertuch 訳編の *Ausgewählte Werke*, 1910 との2つで、鷗外生前は勿論最近までこのほかのものは刊本として見当らないようである。前者はライプツィヒの Grethlein 発行で蛙を含む「自伝」全巻の翻訳にほかならない。後者はシュトゥットガルトの J. G. Cotta 版二巻のミストラル選集で、第二巻に *Aus den Erinnerungen und Erzählungen* として、「自伝」中の真の自伝の部分の2章だけがはいっており、ただいまの場合鷗外訳と何等の関係を持たない。そこで右のクラーツ訳本中の「蛙」をベルリンの *Deutsche Staatsbibliothek* がマイクロフィルムにとって送られたものを、原作のプロヴァンス語乃至仏語版「自伝」と対照してみると、すべての点で前者は極めて後者に忠実であって、その点鷗外訳とは大きな差異がある。なお人名地名等はフランス語化したもので、明かに仏語版を底本としている。

## 7

さきに述べた、原作と邦訳との内容の相違の原因を問題とするために、あらかじめ原作の2つの版と独訳の刊本とのことに触れた。ここに、鷗外訳そのものに立帰ってこの問題を検討してみたい。

私が見た雑誌「我等」の第七号（大阪府立図書館所蔵）には、毎号の巻末にある「消息」の頁が今はちぎれて存在しない。しかし仮にそれが残っていたとしても、この短篇の翻訳にあたって鷗外が使用した底本についての知識がそこから得られそうにないことは、他の号の「消息」の書きぶりで明かだ。単行本



「蛙」にもそのようなことは一切しるしてない。その他鷗外自身の手になるものでは日記の大正3年6月22日<sup>2)</sup>の条に「ナルボンヌの蛙を訳す」とだけあるのが唯一のものである。「全集」で「蛙」の収録せられている巻の後記にも、この篇の原題あるいは独訳などの項は空白であり、翻訳の底本についても何の記述もなく、単に「東大の鷗外文庫中にはミストラルのものは見当らない」とあるのみ。それ以前の旧版「全集」にも勿論参考になることはない。鷗外文庫に関しては、曾て私が東洋大学の野溝七生子（板垣直子）さんの好意に甘えて調査して戴いたときも、その後35年6月及び11月に私自身が直接に別の面から同文庫に就いて調べた際にも、この後記に書かれた通りであることを確め得た。故山田珠樹に依れば<sup>3)</sup>、鷗外蔵書が東大附属図書館へ大正15年に運ばれた際（正式の寄贈手続は整理の関係からその後数年してなされた）、与謝野寛のもとにあった鷗外自身の著述、切抜、雑誌、また遺子の人々のもとにあった辞書や雑誌、そのほかある程度のものは寄贈から洩れ、その後山田が自ら勤めていた同図書館を昭和8年に離れるころまでには、同館へは来なかったそうである。おそらくその後も同様であろう。これら寄贈に洩れたものの中に、ミストラル翻訳に使われた資料があったのかも判らないと想像した。

鷗外が、ヨーロッパの新聞雑誌に所載のものから翻訳することの多かったのは周知のところ。晩年の彼と交渉の深かった後藤末雄氏は、昭和35年11月20日、同氏邸で私に大要つぎの如く申された。「先生の『蛙』はドイツ訳に依ったものと思う。晩年の先生は外国新聞から翻訳の材料を得られることが多かったので『蛙』のもとも多分そうではなかったか。そうして、新聞であったために散佚して伝わらなかったのであろう。」

鷗外のおびただしい翻訳作品のうちでフランスもののそれは、「全集」翻訳篇18巻中でわずかにその第16巻所収のもののみであるが、その中の計16篇（フランス語のベルギー作品1篇を含む）において、原題も独訳題も（というのは彼の欧米作品の翻訳はその絶対多数がドイツ語のものからなされたから）一切求め得ないと後記でしているものが8篇、底本となった原作も独訳も鷗外文庫中

に見当たらないとするものが9篇存する。後者のうちでは、2篇（そのうち1篇は没年未詳の作者のもの）を除けば他は鷗外がそれらを訳した当時に生存したか、または死去早々の作者のものである。かくして、明治末乃至大正初年の鷗外は、死去もしくはその他の何かの機会に定期刊行物に掲載せられた欧米作家の短篇を和訳することが多かったと申せる。しかも、自らの後書で本邦初訳であろうと自負している「聖ニコラウスの夜」のベルギーのルモニエ（鷗外流にはルモンニエエ）は大正2年6月13日の死でその邦訳は同年10月28日となっており、大正3年3月25日に世を去ったミストラルの「蛙」はさきに述べたように同年6月下旬に訳しおえている。このためには、航空の便を求め得なかった当時として（否、今日でも雑誌や書籍を外国から飛行機で取寄せるのは普通にはしないところである）、書籍や雑誌では間に合わぬ場合が多く、やはり第一には日刊新聞が最も都合のよい材料の供給源であったと考えられる。

その新聞としては、第一にドイツ乃至はドイツ語のそれを想定すべきである。すると、明治42年から大正3年までの間「スバル」「我等」「番紅花」の三誌にそれぞれ「椋鳥通信」「水のあなたより」「海外通信」の題で連載せられた欧米の消息を収録した「全集」著作篇第21巻の後記に、鷗外長男の森放菟氏がこれらの材料の出所として想像せられているベルリン発行の *Vossische Zeitung* がまず脳裡に浮かんで来る。故齋藤茂吉はさらにこれらの出所に関して、「ドイツ新聞3種類ほど、フランス新聞1種ほどであつたらうか」と有力な暗示をなしているがその新聞の名はしるしていない<sup>4)</sup>。この件に就いては、私も数年前記事にしたことがあるので詳説を省くこととする。

さて、「全集」著作篇第24巻に正味2頁足らずの小記事「青山君に就いて」というのがある。この第24巻は、「雑纂」という総題のもとに、手記、雑纂、漢詩文、序跋題辞、広告文、談話、独文の諸篇、年譜、全集著作篇総目索引の各題に分類せられており、この後の第25巻から最後の第33巻までは、医事関係、日記、書簡にほかならない。その談話の最後がこの「青山君に就いて」で、もと大正7年3月「伝染病研究所学友会雑誌」第3年第1号に、筆者の末弟故森

潤三郎の筆記で掲載せられたものである。その中に

青山君は余程以前から *Koelnische Zeitung* といふ新聞を取つてゐた。

(中略)この新聞は自分の読んで仕舞つた跡を、直ぐおれにくれた。おれは当時 *Berliner Tageblatt* といふ民主主義者の出す新聞を取つてゐた。(中略)これと交換し、おれの読んだ跡は陸軍軍医学校に寄附することとしたが、手続きが煩はしいため、何時となく止めてしまつた。

という個所がある。ちなみに青山(胤通)君とは、旧東京帝大医科大学教授で鷗外の親友であり、息放菟氏の師であった当時の医界の大御所的存在である。放菟氏自ら「胤通と鷗外<sup>5)</sup>」という思い出話をものしており、また私の昭和37年秋に出した質問状に対して、鷗外が右の「ベルリン日報」を購読していたのは明治40年ごろから大正5、6年までであったと答えた。そこで東大図書館について、この新聞の1914年3月26日すなわちミストラル死去の翌日からの紙面に何かの手がかりはないものかと捜してみたところ、26日の朝刊にミストラルについての追悼記事を見出し、ついで27日の夕刊に、目ざす「蛙」の独訳記事を発見した。この独訳を鷗外の日本訳と対照してみると全く符節を合わす如くであり、さらに右の追悼記事の内容とも相俟って、鷗外が依った底本はこれに相違ないという確信を得た。「全集」の端から端まであたってみて、この新聞「ベルリン日報」に関しては「青山君に就いて」の中のほかには全く鷗外は觸れるところがないことを知っていたので、この眇たる記事は私にとって暗闇の中に一道の光を見出した思いであった。

## 8

問題の「ベルリン日報」紙の独訳とは、*Der Frosch von Narbonne von Frédéric Mistral* フレデリ・ミストラル作「ナルボヌの蛙」というもので、*Mistral* の語の後には死去の印の十字がついている。ミストラルの名はフランス語流には *Frédéric* フレデリクであり、もしこれをプロヴァンス流に綴るならば *Frederi* となつて、2つの e の上のアクセントは不用のはず。多分訳者

の不念か新聞の誤植かで c が落ちたのであろうが、ともかくこの書方からしてプロヴァンス・フランス 両語の混用である。題名の Narbonne の後には、Nachdruck verboten 無断の複製を禁ずと括弧して入れ、篇末には Autorisierte Uebersetzung von Julia Büren-Hahn ユーリア・ビューレンハーン公認訳としてあり、分量は新聞 1 頁の 5 分の 2 くらいを占める。

ミストラル原典でも前述のクラーツ独訳でも (1) から (4) までの節別があるが、このビューレンハーン訳にはそれが存在せず、その切目切目にあたるところに行の明きも設けてない。これは鷗外訳の通りである。

さきに私は、鷗外訳に見る原典との大きな違いとして、1 に全体が縮めてあること、2 に人物の名や記述内容に、違い、出入り、入れかわりのあること、3 に物語の結末が派手になっていること、を挙げておいた。1 の縮約は原作の第 1 節、特にその前半において著しく、特に冒頭から 2 段目は 5 分の 1 ほどに削って、原作にはない「それを思ふと、足を早めずにはゐられない」という文句を足してある。ところがビューレン訳では、それらの具合が全く日本訳の通りであるだけでなく、後者で「グラスへ通ふ稍険しい坂道」(圈点の部分は原作にない言方) とあるのが、前者ではそのまま ...den ein wenig steilen Weg, der nach Grasse führte... となっているし、原典では(以下プロヴァンス語文を省いて原作者訳のフランス語文のみを挙げる) une après-midi du mois de juin 「6 月のある午後」というのがこの独訳では ...an einem schönen Junitage... となって、鷗外訳の「好く晴れた 6 月の日で」とあるのに合致するという風に、こまかい点まで齟齬するところがない。「それを思ふと、足を早めずにはゐられない」というのは、4 年の間留守にした故里へ帰るからであるが、これがビューレン訳の ...bei dem Gedanken daran beschleunigte er seine Schritte. を和訳したものであることが判る。

2 の方では、人物の名で、ミオンとある女がロゼットとなり、かつ「聖マグダラ云々」の言葉が和訳では全くなくなっていると、私は申した。この独訳でもやはり名は Rosette で、聖マグダラの件も同じである。また第 3 節での父

子の対話が原作に比べて随所に小さな削除を伴い、かつちぐはぐになっていることを私は指摘した。この点もビューレン訳においては、和訳とぴったりと合う。原作、クラーツの忠実な独訳、ビューレン訳、和訳と、この4つを並べて示せばその点が極めてはつきりするのであるが、煩瑣なばかりとなるので割愛する。また、3人の乳母と大司教館とが鷗外訳で全く省かれていることも、ビューレン訳においては、Dort sah ich mir die Holztäfeleien in der Kathedrale von Saint-Paul an. でその通りなのである。

3に、結末の蛙の始末はビューレン訳でどうなっているのであろうか。

Und er zog einen Hammer aus seinen Ranzen und schlug wie wütend auf den Frosch los...

Man sagt, daß das Weihwasser im Becken sich plötzlich rot färbte, als wäre es aus Blut.

So kam es, daß die Stadt Narbonne um eine Sehenswürdigkeit ärmer wurde...

これで見ると、wie wütend 狂暴に、が「力まかせに」となり、losschlagen (auf) 打ちかかる、が「続け打」になったぐらいで、鷗外訳はほとんど全くビューレン訳と同じである。さらに附加するならば、このすぐ前のところにピニユレーが聖水盤の中をのぞくと、

……緑いろに光る蛙が造り付けてある。背には赤い筋がある（中略）ピニユレエを冷かすらしく、広い口をして、大きい、金色の目で……

と和訳にあるうちで、緑いろに光るの部分は前同様原作にない語句であるが、これもまたつぎに示すように、「ベルリン日報」所載訳そのままである。

...saß wirklich ein gründlich schimmernder Frosch, der rote Streifen auf dem Rücken hatte. Er... mit seinen großen, goldenen Augen...

ただ gründlich は grünlich の誤植であるらしく、それを察して鷗外は「緑いろ」としたのであろう。

以上に比較した如く、ビューレンハーゲン訳はほとんど完全に鷗外訳と一致するのであるが、さらに鷗外がこれを基本としたという他の証拠をさがしてみたい。

「椋鳥通信」及び「水のあなたより」にはミストラルについて計5回の記事があるが、その最後のものである「1914年6月15日発」のものにこうある。

Frédéric Mistral 83歳で死んだ。場所は莊園 Maillane 即ち1830年9月8日に生まれた所である。主な作は Mirèio である。1904年 Sienkiewicz, Echegaray と一しよにノーベル賞を得た。

実は、エチェガライはその通りでこの年には1個のノーベル文芸賞が2人に折半せられたのであるが、シエンキエヴィチがこれを得たのは翌年の1905年であった。

ところで、さきに述べたように、ビューレン訳の掲載せられた「ベルリン日報」の前日の紙面（1914年3月26日朝刊）に、死去したばかりのミストラルを追悼する Sigmar Mehring の Frédéric Mistral という記事が出ている。この筆者は仏英等の辞典には知られないが、今日でもドイツ及びドイツ語の百科辞典や文芸辞典には紹介してあるところを見ると、当時のドイツではある程度乃至相当に名のあった人に違いない。記事はメーリングの署名で一応終わったのち、今度は署名のない短い記事が続き、全部で新聞の3分の1頁ほどを占める。そのメーリング署名の文の冒頭に

...Frédéric Mistral ist gestern auf seinem Gute Maillane dreiundachtzig Jahre alt gestorben. Er ist in dem Hause gestorben, in dem er am. 8. September 1830 geboren wurde, in dem er sein ganzes Leben gewohnt hat und in dem er seine "Mirèio" und sein Lexikon der provenzalischen Mundart geschrieben hat.

とあり、もう少し先に

1904 erhielt er den Nobelpreis zusammen mit Sienkiewicz und Echegaray.

と記してある。ミストラルがマヤーヌの村に生涯を送ったのはこの文の通りの事実ながら、ここにいうようにその生まれた家で死んだのではなくて、同じ村の中でも家は異なる。この点鷗外の記事の方は、それをはっきりと申していないから、まず問題はない。以上を「水のあなたより」の記事と比べると、終の方が省かれているほかは全体によく似た書方であり、就中「1904年シエンキエヴィチ、エチェガライと一しょにノーベル賞を得た」という誤った報道をも鵜呑にした個所が、メーリングの透写しの証拠となる。それも3年の以前、「1911年2月1日発」で、それまでにノーベル文芸賞を受けた文士の名を表にしたものを自ら出している中に「1904年 Echegaray-Mistral」として、シエンキエヴィチの名は見えないのだから、猶更のことである。さらにメーリングはずっと後の方で、

...im Jahre 1904 ihr größter Lyriker mit der Hälfte des literarischen Nobel-Preises abgefunden wurde, während man für die andere Hälfte den spanischen Dramatiker José Echegaray als würdig erachtete.

(ihr は die Franzosen——フランス人たち——の意)

として、ミストラルとエチェガライとの兩人にその年のノーベル賞が折半せられたことを明記して、シエンキエヴィチのことには何等触れないという、さきの自らの記述と撞着した書きぶりをしている。

以上のように、独訳文そのものが鷗外訳と合致することを第一とし、メーリングのミストラル追悼記事と「水のあなたより」の記事との相似、「ベルリン日報」を購読していたという鷗外自らの言葉、さらに年代的にそれが明治40年ごろから大正5、6年までのことであったという森於菟氏の証言によって、鷗外がその訳篇「ナルボンヌの蛙」即ち後の「蛙」をものするに用いたテキストは、原作者ミストラルの死去直後、「ベルリン日報」に掲載せられたユーリア・ビ

ビューレンハーンのドイツ訳に相違ない。

## 10

ビューレンハーン訳が「ベルリン日報」に出たのは、勿論ミストラル死去の記念のためであったには違いないが、この訳にはそのような事情をしるす前書も後書もついていない。前日のメーリングの追悼記事にも、ドイツ文字のかなり長い文を、乏しいその語の力しか持たない者が時間の制約を受けて急いで目を走らせたこと故、見逃しがなかったとは申せないが、翌日に出るこの翻訳のことには触れていないらしい。また、同じ新聞の他のどこかにそれがなかったとは断言する勇気を持たないし、大阪附近にこの新聞の所在を知らないのでもう一度確かめることもしないでいるが、1914年3月26, 27, 28日の3日ほどについては、少くとも文芸欄にはどうも見当らなかつたと思う。

この翻訳には *Autorisierte Uebersetzung* ということが書いてある。当時乃至今日のドイツあるいは独仏間などの出版法規や事情は知らないが、この *Autorisierte* 云々は、鷗外文庫中にあるドイツから見ての外国の作物の翻訳にも数多く見える。ところで、「蛙」を含むミストラルの「自伝」には前に申したように、クラーツの忠実な完訳がすでに1908年に刊行せられていた。しかるにその出版の6年後に新聞に現れた1短篇の再度の翻訳が *Autorisierte Uebersetzung* の名称を持っているのはどういうものか。同じ作の違った翻訳は何度でもまた *autorisieren* せられ得るのか、前のクラーツ訳は *autorisieren* せられたものではなかったのか、それともベルリンとライプツィヒというように土地が異ればそういうことも当時可能であったのか、その *autorisieren* は原著者または原出版者との間のものか、私には何とも理解出来ない。しかもビューレン訳は、原作を離れたドイツ文としての味は知らないが、翻訳としてはミストラル原典に基だ不忠実に見えて、右のような勿体をつけるだけの値打はないと考えられる。

この訳者については、今日及びやや古いイッの各百科辞典 Meyer, Brock-



haus, Herder 及びベルン版 W.Kosch 編 Deutsches Literatur-Lexikon には記するところがない。当時の人名録でも調べたらあるいは見当るかも知れないが、いずれ名の残るような人物ではなかったのであろう。従ってその本国でも調査すれば格別、こちらではどんな著訳を他に出したのか、ミストラル物の訳がほかにもあるのか、この「蛙」の訳はこのとき「ベルリン日報」へ出したのが発表の最初か否か、全く不明である。あるいはメーリングあたりの推薦で、その追悼記事の直後に出すべく大急ぎで訳したものではなかったか。そこで、一方では紙面の制約があったか、または訳出に厄介だからか、一般に興味の薄そうな個所であるからかで若干部分を省き、途中で父子の対話の順を不注意に取りちがえたりわざと入れかえたりして辻褄を合せ、結末を派手にしてそれこそ「物語の効果が高まった」（鷗外がルモニエ「聖ニコラウスの夜」で原文を適当に省略して訳したときの後書）ようにしたものではなかったろうか。わずかに数頁の原作のことであるから、相当なフランス語の力のあるドイツ人なら、一日かければ翻訳は不可能ではない。

もしもそうでなくて、忠実な翻訳、ミストラルの死をあてこんだ際物でない訳だとしたら、その原典からしてこれと符合するものがなくてはならない。ところが、われわれの知るミストラルの「蛙」には2種類しかない。即ち刊本「自伝」中のプロヴァンス語原文と作者自訳の忠実なフランス語文、これがその1つ。今1つはその元である雑誌「プロヴァンス年鑑」の1890年号中のプロヴァンス語文である。鷗外訳は「自伝」中の「蛙」よりはむしろ「年鑑」中のそれにやや近いが、ビューレン訳は即ち鷗外のものと同じであるから、このドイツ訳についても同様なことがいえる。しかし、「年鑑」の「蛙」とドイツ訳のそれとの差は、「自伝」の「蛙」と「年鑑」のそれとの差に比すると、言語の違いに基く点は論外として、内容において比較にならぬほど大きい。故に、右2つの原作以外に、そのさらに原型か異本ともいうべきミストラル作があるか、あるいは原作をよい加減にくずしたもの（少年少女物語か何かとして）が存在したのでなくてはなるまい。この2つとも今のところ想像は出来にくい

が、もしも在ったとしたら後者の方で、独訳はそれに依ったとなろう。何にせよ、ビューレン訳は原作のフランス語訳に依ってプロヴァンス語原文に従わないことは、地名人名の一切が仏語式の書方 (Pignolet, Marguerite, Grasse ...) を踏襲して、プロヴァンス語式の言方 (Pignoulet, Margarido, Grasso ...) を採っていないことでも明かである。

## 11

原作の女の名 **Mioun** ミウン (仏 **Mion** ミオン) が鷗外訳で「ロゼット」になるのは、ビューレン訳の **Rosette** をそのまま受取ったことで解るけれども、独訳がこのように変えている理由が問題である。これから述べるのは一つの推量であるが、勿論その前提として、**Mion** が **Rosette** になっている原作はないとしてのこと。プロヴァンス語のルゼート **Rouseto** 仏語のロゼート **Rosette** の元はそれぞれローズ **Roso** ローズ **Rose** で、仏語形の2つはドイツ語でも綴りはそのままになり得る。ところでドイツ語には **Rosmarin** (まんねんろう) なる植物が存する。即ちフランス語の **romarin** あるいはもっと科学的には **rosmarinus** と同じで、いずれにせよ、語原的にはラテン語の **ros-marninus** (海の露) であることは辞書にも出ているが、俗これを **Rose-Marie** とする。また、**Rose-Marie** あるいは **Rosemarie** という人名も使われている。そこから **Marie** を **Rose** で置きかえることも生ずるかも知れない。フランスの **Marie** は **Marion** を経て **Mion** までくずれるので、**Mion** などというドイツ人になじみのなきような変な名に代えて **Rose** を指小的にした **Rosette** を持って来た。実は独訳者としては、主人公の **Pignolet** やその父の **Pignol** などの名もドイツ人にもっと親しい名に代えたかったのであろうけれども、右の場合のように有縁で適当な語を見出し得なかったのも、そのままとした、というわけである。それなら **Marguerite** はどうして同系のドイツ名 **Margarete** にしていないのかといえ、これはそのままでも十分ドイツ人に受入れられると考えたからではあるまいか。

鷗外が「蛙」の翻訳に用いたテキストの判明は、これからの彼についての研究にどういふ影響を与えるのであろうか。その一つだけを、簡単に述べてこの論稿の結びに代えたい。

「ベルリン日報」は勿論、鷗外が自らの書いたものにその名を挙げているドイツその他の新聞雑誌類の彼在世中の号には、今もわが国で所在の明かなものがある故、それを丹念に査べることによって、現在の「全集」でも不明になっている原作あるいはドイツ訳の表題、和訳にあたってとられたそれらの版、さらにはその他の評論や紹介などの種、がつぎつぎと判明して行くであろう。現在の「全集」や鷗外関係のこれまでの評論伝記においてこの方面の考証はまだ不備である。「全集」翻訳篇18巻中医学などの関係の2巻を除いた16巻の文芸作品を集計したならば、この題名底本不明の数は相当大きなものとなる。それらの中のかなりのものが、当時の新聞（乃至雑誌）を渉猟することで明かとなるのは確かである。同時に、それぞれの国の言語や文芸に通じた研究者ならば、鷗外が採択した底本の良否、これに伴ったそれらの新聞などに載った紹介や評論のどんな記事が、彼によって取入れられてその筆にどんな風に現れて来たか、そういう影響は結果として彼自身に、ひいては日本の文壇や学界に善かったか悪かったか、が判明して来よう。ハルトマンとかゴトシャルとかの大家やその著書に鷗外思想の源泉を求めるべきは当然であるし、それさえまだ完全にはなされていないと思うけれども、それだけで十分とはいえない。鷗外生前からしばしば問題となった彼の翻訳態度、手法、その出来ばえなどについても、まずその底本を明かにすることに立ちもどらねばなるまい。私も、「蛙」に関するかぎり、鷗外の採った原文のテキストは悪く、しかしひとたび採ったその原文には甚だ忠実であることを知ったのであった。

## 註

1. 「新小説」臨時増刊「文豪鷗外森林太郎」大正11年8月刊中の広瀬哲士筆「鷗外と仏蘭西文学」及び、山室静著「評伝森鷗外」実業之日本社昭和35年刊、第107頁に、これについて多少触れてある。
2. 「全集」著作篇第32巻。
3. 「日本古書通信」昭和15年6月5日第131号中「鷗外文庫寄贈顛末」。
4. 「斎藤茂吉全集」第10巻（昭和29年岩波書店）中「椋鳥通信」。この記事はもと雑誌「芸林間歩」昭和23年3月号所載。
5. 東大沖中 内科内青山先生生誕百年祭準備委員会「思い出の青山胤通先生」中。昭和36年3月刊。